

**体験格差解消を目指した
特別支援学校との連携による水辺の体験教育の普及事業**

実施報告および事業事例集

【はじめに】

B&G財団では、身体的・経済的理由から水辺の体験活動に参加することが難しい障害児や児童養護施設の子どもを対象に、「楽しく水辺で遊べる体験会」を実施することで、「体験格差解消」を目指してきました。

更に多くの障害児へ「水辺の自然体験」の機会を提供するため、徳島県をモデルケースに徳島県教育委員会と県内の特別支援学校と連携を図り、体験格差解消を目指すべく「水辺の体験会」を実施。その事例をまとめましたので、各海洋センターで実施する場合は、参考としてください。

1. 水辺の自然体験活動の効果

■少年期の自然体験活動の重要性 ～小さな冒険が心を育む～

少年期の自然体験活動は、コミュニケーション能力や自尊心など「社会を生き抜く力」の醸成、規範意識や道徳心の育成などのほか、学習意欲の向上も認められています。また、最近の研究では 非認知能力を 高め、脳の発達にも良い効果があることが明らかになってきました。

期待できる効果

- ①水泳などウォータースポーツの経験と楽しさ
- ②自然環境や動植物への関心(自然愛護)
- ③ルールやマナーなどの規範意識
- ④「自分の命は自分で守る」という自助意識
- ⑤相互理解、寛容・信頼と責任感や連帯感の涵養



生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育む

2. 水辺の自然体験活動の特徴

■水辺の自然体験活動は陸上と比べこのような特徴があります。

- ①**五感を強く刺激する**
水の冷たさ、潮の香り、波の音、海水の味など五感への強い刺激
- ②**非日常性が高い**
浮く、沈む、全身を濡らすなど、日常生活では行わない動作が多い
- ③**高いリフレッシュ効果**
海辺や川辺では癒しやリフレッシュ効果が認められ、ストレス解消につながる
- ④**変化に富んだ自然環境**
毎回違う波、日々異なる潮汐、午前と午後で変わる風など時間とともに環境が変化する



これらの特徴を活かすことにより、高い学習効果・教育効果を狙う

3. 事業全体の流れ

Point
1

■プログラム打ち合わせ 4月

B&G財団と徳島県教育委員会・特別支援学校で実施時期や内容についての打ち合わせ



Point
3

■水辺の安全教室 7月

学校のプールで、背浮きやライフジャケット浮遊、カヌー体験などの「水辺の安全教室」を実施



Point
2

■教員体験会と実技研修 6月

背浮きやエレメンタリーバックストロークなどの指導補助講習と海洋性スポーツ体験

Point
4

■フィールド体験学習 8～9月

艇庫を利用し、海洋性スポーツなどの海辺の自然体験活動を実施

Point
5

■検証 10月

児童・生徒へのアンケートや教員、現地指導者など関係者のヒアリングでプロジェクトを検証



4. 体験会実施までのモデルケース

近隣の特別支援学校対象に体験会を実施する場合の流れです(モデルケース)

確認事項等

■県教育委員会への打診(前年度)

・県教育委員会や県内特別支援学校への事業説明等

■体験会実施日の日程調整(3月～4月頃)

・実施希望校の選定
・各学校との体験内容を協議(スケジュールやプログラム内容)

■教員研修会(6月～7月上旬頃)

・(必要に応じ)教員に対し、事業趣旨の説明やプログラム内容確認のための体験会や説明会を実施。生徒に適したプログラム内容の策定

■教員・センタースタッフ打合せ

■(必要に応じ)児童・生徒への事前学習会
(2週間～数日前)

体験会実施(夏休み前～9月頃)

・特別支援学校への出前授業(プール)
・海洋センター艇庫での水辺体験活動
・海洋センタープールでの水辺体験活動 等

■児童、先生等へのアンケート

■スタッフ反省会・振り返り

5. 実施事例（入水準備・ライフジャケット着用・水辺の安全教室 等）

【実施事例①】 小・中学生対象

■参加者:16名(中等部2~3年生7名、小学部1年生1名、教員8名)

■場所:美波町B&G海洋センタープール

■実施プログラム:水辺の安全教室・SUP、BIGSUP体験(希望によりカヌー、ボディーボード、浮き島)

入水準備

挨拶・準備運動・バディ・シャワーなど

※バディは学校側に確認し、普段の学校プール授業でも行っているのであれば、同じスタイルで行うのが良い
※シャワーのタイミングは天候やプログラム内容等によって柔軟に実施

ライフジャケット着用



指導ポイント ライフジャケットに慣れさせる

- ・正しい着用ができているか
 - ・身体にフィットしたものを着用させる
- ※該当学年よりも、身体が小さい子供や大きい子供もいるため、サイズは事前に学校に確認するのが望ましい

水辺の安全教室（ライフジャケット浮遊体験）



指導ポイント 水中での安心感を与えるため、ライフジャケットの浮力を体感させる

- ・顔に水がはねることを非常に嫌う子供もいるため、配慮する
- ・緊張から身体が強張ることも多いため、身体力を抜きリラックスすることを伝える
- ・子供の反応を見ながら、プール内歩行やジャンプ、エレメンタリーバックストロークなども実施
- ・背浮きの姿勢になる場合は、勢いよく倒れる子供もいるため、ゆっくりと仰向けになるよう指導
- ・指導者による「見本」から子供の「実践」の間隔は、短めにすることを意識する！（多くの説明をしても理解されにくい）

水辺の安全教室（背浮き体験） 難易度★★



学年が上がると、友達同士で水辺に遊びに行く子もいる



可能であれば、ペットボトル浮きにも挑戦

指導ポイント 学年が上がると、通常の水辺の安全教室同様に実施可能

- ・ライフジャケット浮遊体験のステップアップとして、可能な場合は「ペットボトル浮き」「背浮き」にも挑戦
- ・健常児同様、背浮きのポイントとして「全身の力を抜き、大きく息を吸い肺に空気を溜める」ことを意識させる。
- ・ゆっくりと仰向けになるよう指導

カヌーやフロート体験(難易度★)



大人用プールに抵抗がある子供の場合・・・

- ・大人用プールへの入水を怖がる場合は、幼児用プールも利用
- ・幼児用プールでも遊べるプログラムも準備しておくが良い
(例:フープくぐり、宝探し、ボール集め など)

5. 実施事例 (SUP・BIG SUP・事前学習会 等)

【実施事例②】 高校生対象

- 参加者: 高校1・2年生10名、教員5名
- 場所: 徳島市B&G海洋センタープール
- 実施プログラム: 水辺の安全教室・SUP体験・BIGSUP体験

SUP体験



「座り漕ぎ→膝立ち→立ち漕ぎ」とレベルを上げていく。立ち漕ぎは難しい子供も多いが、ステップアップしていく過程に**達成感**を感じられる

指導ポイント 段階を踏ませることで「成功体験」に結び付ける

- ・乗降艇時は注意が必要。指導者がフォローしながら、座らせるなど、低い姿勢をとらせる(重心を下げ、転落を避ける)
- ・座り漕ぎから→膝立ち→立ち漕ぎへと徐々にステップアップ。
- ・膝立が出来る生徒は、立ち漕ぎに挑戦。
- ・プール内にもスタッフを配置し、不安感の払拭やSUPが勢いよくプールサイドに乗り上げないように注意

- ・サップは、[座る→膝立ち→立つ]とステップアップの過程がわかりやすいため、周囲からも成果が目に見えやすい。
- ・健常児は、すぐに乗りこなしてしまう場合も多いが、支援学校の子供は「立ち漕ぎ」は難しい子供も多い。しかし、指導者や教員からの応援や後押しにより、それに応えようとするなど「挑戦心」も育まれる。
- ・障害児が、「出来ないことが出来るようになった」など、壁を乗り越える体験は、**自信にもつながっていくため**、指導者は積極的に、「ほめる」など子供たちを後押しすると良い。

BIG SUP体験



指導ポイント

SUP同様。
大人数が乗艇できるメリットを活かし、クラスメイトと一緒に挑戦してみよう！

※BIG SUPは、車いすのまま乗艇可能のため、車いすユーザーの子供にも適しています。

教員研修会

体験会に先駆け、海洋センターで「教員研修会」を開催。実際のプログラムに沿って教員も体験しながら、補助方法も学んでもらうとともに、生徒の理解力にあったプログラム内容等も相談。

→子供の特性を把握している教員は、当日の大きな助っ人に！！



事前学習会

生徒に対しては「事前学習会」を実施。海洋センター指導者が学校へ訪問し、体験会の内容等について説明。生徒の緊張感をほぐすとともに生徒のモチベーションをアップを図った。

- 目的: 顔合わせ、生徒の不安解消、生徒の理解度確認 等
- 主な流れ(例)
挨拶→自己紹介→ライフジャケットについて(サイズ・着用方法等)→映像による説明(海洋センター紹介・SUP等器材説明・扱い方 など)→質疑応答



6. 安全管理や障害児指導の留意点等

【事前準備】

支援学校に通う子供の特徴の一つとして(特に知的障害児)、「日常とは異なること」や「初めての人・もの・こと」に対して、非常に敏感であるなど、適応能力が低いことがあげられる。そのため、以下に留意する。

■具体例

- ・海洋センターで実施の場合は、初めての場所に緊張する子供も多い
- ・学校で実施する場合も、“普段見慣れないもの”や“普段は置いてない場所に置いてあるもの”に対して、過剰に反応する場合もある。そのため、持ち込んだ舟艇器材やライフジャケットの置き場所なども、配慮が必要(学校にも確認)
- ・突然のプログラム変更などには、対応できにくいこともある

【プログラム策定(全般)】

- 障害児は、健常児よりも準備や移動に時間がかかることもあるため、体験会プログラムは時間の余裕をもったスケジュールを組むと良い
- 同じ学年であっても、個々の理解力に個人差があることを想定しながら、プログラムを組む
 - 場合によっては幼児用プールの利用や別メニューも提案
- 学校での実施を検討する場合は、プールの有無や大きさを事前に確認(20メートルプールの場合もある)
- 海洋センターで実施の場合は、移動手段の確認も行う

必須ではないが子供たちの不安感払拭のために、「事前学習会」も有効。(教室への訪問やオンライン実施など)

【内容】

- ・顔合わせ
- ・道具(器材やライフジャケット等紹介)
- ・海洋センター施設紹介など

【体験会中】

- 可能な限り、抽象的な表現や曖昧な表現は避け、具体的な手順や方法を伝えるよう意識する
- 「水辺体験」の特徴を活かし、子供に成功体験を味わってもらい、自信につなげていけるよう意識する

■具体例

- ・健常児よりも理解力が乏しい場合もあるため、子供たちが混乱せずに理解出来るよう指導者が見本を見せる場合は、健常児よりも「手本→実践」の区切りを短くすることを意識する
- ・新しいことへの挑戦のため、出来た時などはしっかりとほめることを意識する
- ・注意力が低い子供もいるため突発的な行動に注意
 - 水を目の前にすると突発的に飛び込んだりする場合もあるので注意。
 - 長引くコロナにより、学校もプール授業を中止している場合も多い。そのため、教員もプールや水面を目の前にした時の生徒個々の反応が読めない場合も・・・
- ・重度障害の子供は、場合によってマンツーマン指導が必要となる。事前に学校側に確認を！
 - 可能であれば、マンツーマン指導には教員に入水してもらう

子供の個性を把握している教員は、“強力なサポーター”となる。

可能であれば、事前に「教員研修会」を実施

【コロナ対策】

- ・学校によっては、校内に重度の障害児も在籍しており、引き続きコロナ対策に慎重な場合もあるため、事前に学校側と打合せを行っておく
 - 例:更衣室の密を避ける(更衣室が狭い場合は、時間をずらす、他の会議室等も併せて使用する)
 - 例:プール内では、生徒同士の間隔が十分にとれるような運営プログラムにする(2グループに分ける) など

7. 教員研修会 実施事例

【概要】

■対象：徳島県内特別支援学校の教員

■参加者：6校8人

■主な内容

- ・体験格差事業 事業趣旨等について
- ・水辺の安全教室の必要性や内容について(LJ着用方法、浮遊体験等含む)
- ・カヌー体験と指導補助の確認
- ・BIGSUP体験と指導補助の確認

■場所：阿南市B&G海洋センター艇庫



■教員研修会のポイント

・教員を強力なサポーターに！！

・教員も初めは「水辺活動は不安」と感じるため、体験会によって、水辺体験の楽しさや有効性を感じてもらう



教員もライフジャケットを着用し、ライフジャケットの浮力等を体感



パドリングや乗艇時の子供への注意点等も説明

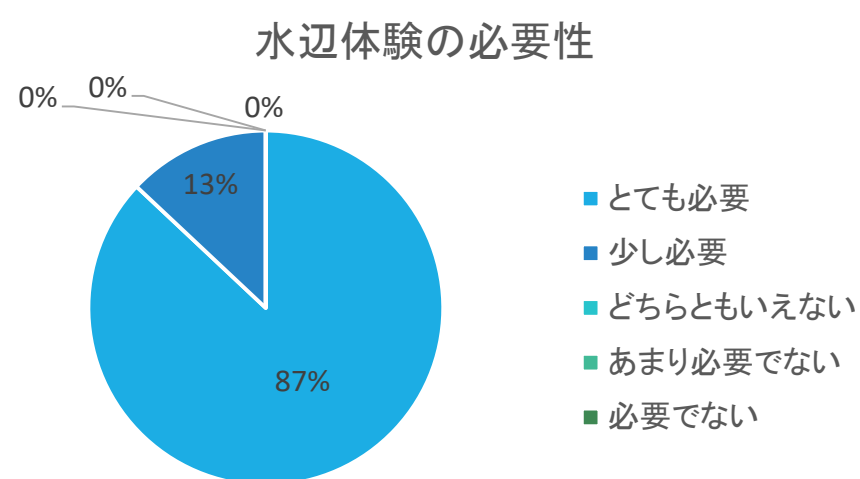


BIGSUP体験。膝漕ぎから立ち漕ぎまで、先生たちも体験。最後には、海に飛び込んだ



教員アンケート

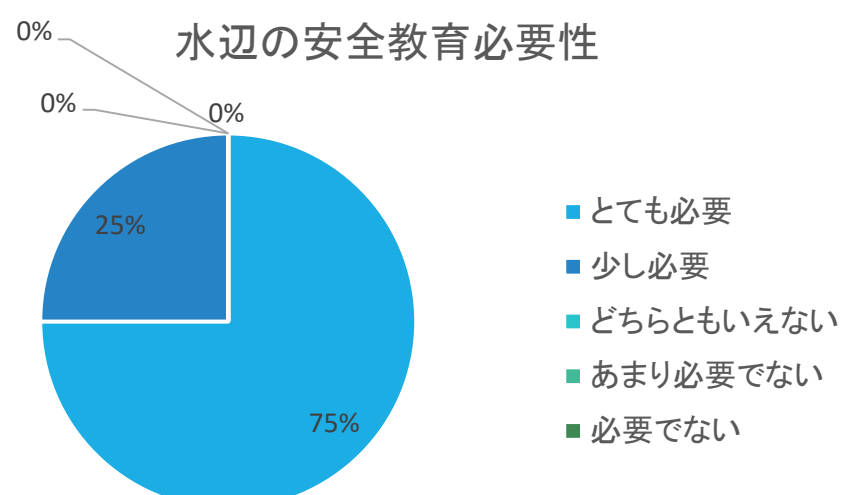
Q1. 水辺の自然体験の必要性について →100%の教員が「とても必要」「少し必要」と回答。



■教員意見(抜粋)

- プール中止など以前よりも水に触れ合う機会は減少している。それらを補っていくためにもとても大切だと感じた
- 水難だけでなく、様々な災害・災難に対して経験をすることで、相手を知りただ怖がるだけでなく具体的な対処法や準備をすることが必要である。
- 自然を相手にした遊びや活動は、実際に体験してみなければ頭で考えていても身につかず、自然という思い通りにならない相手に、自分が工夫したり気を付けたりして活動することは生きていくうえでとても大事な力になるだろうと考える。学ぶことも大きく、できた時の達成感も感じられる。

Q2. 水辺の安全教育(安全教室)の必要性について →100%の教員が「とても必要」「少し必要」と回答。今回実施したプログラムの中では一番教員からの要望が高かった。



■教員所感(抜粋)

- 生徒も海以外にも釣りにいくなど様々な水辺へ行く機会がある。もしもの時の対応のためにも水辺体験をしておくことが大切
- 普段は支援学校の子供たちは、水辺で遊ぶ機会が少ないと思うが、いざという時に事故を防ぐためにも水に慣れる体験は必要だと思う

7. 教員研修会 実施事例

教員アンケート

Q3. 今回の教員研修会の感想や意見等

- 実際に体験したことで、子供に対する支援の方法を考えるきっかけになりました。
- 体験しながら「これは(生徒が)出来そう、難しそう」など考えることができたので良かったと思います (BIG SUPは難しそうでした)
- BIG SUPの存在を知れて、車椅子の子供も出来るということに驚きました。海に触れられる経験の少ない子供たちに安全に自然(海)に触れられる機会があれば良いと思いました。
- 勉強をさせていただいたつもりだったのですが、自分がとてもはしゃいでしまう位とても楽しかったです。生徒と一緒にだとまたもっと違った楽しさがあるだろうと思いました。友達となかなか出来ない体験ができるのはありがたいことだと思います。

求められる「安全教育」と「障害児への自然体験」

今回の教員研修会プログラムの中では、「水辺の安全教育(水辺の安全教室)」への要望が一番高く、障害の度合いに関わらず安全教育は行って欲しいとの意見が多かった。

体験会に参加後の生徒からも「海や川の水辺について知ることができて良かった」との感想もあり、安全に関わることは障害の有無に関わらず学んでおく必要がある。

8. まとめ

コロナ禍でますます広がる体験格差。正しく、恐れ有意義な体験を！

「子供たちは水に入る機会が著しく減っているため、水の怖さも知らない・・・」

これは、ある教員の言葉である。長引くコロナ禍で、徳島県内の支援学校の多くは2022年度もプール授業を行っておらず、子供たちは丸3年間プールに入っていない状況である。

家庭で海やプール、水辺に遊びに行った子供たち以外は、全く水に触れ合う機会が無い子供もいるのではないだろうか。

もともと、体験の機会が少ないハンディキャップがある子供たちを対象に「体験格差解消」を目指して実施した本事業であるが、長引くコロナで、障害児は外出する機会も減り、その格差は更に広がりつつある。

新型コロナも2023年5月からは感染症法上の分類が5類に引き下げられるなど、通常の社会活動が戻りつつあるが、引き続き障害児の外出機会や体験活動の機会が減少したままの状況となる場合、健常児との体験格差がますます広がることも懸念される。

そこで、我々B&G指導員も十分な感染対策をとりながら、柔軟に工夫して子供たちに自然体験の機会を提供していく必要がある。

B&G財団では、今後もハンディキャップの有無に関わらず、全ての子供たちに自然体験の機会を提供していく。